精神障害領域における青年期・成人期の発達障害者支援ツール開発のための予備調査

飯田妙子*[,1)]、藤田さより[1)]
[1)]聖隷クリストファー大学

【背景】精神障害領域では、青年期以降に自閉スペクトラム症(Autism Spectrum Disorder; 以下、ASD）と診断される患者が増加傾向にあり、作業療法士（以下、OTR）が ASD に関わる機会も増加している。しかし、青年期 ASD をはじめとした発達障害に対する十分な支援実績は蓄積されておらず、支援体制の整備や専門職向けの支援プログラムの必要性が指摘されている。

【目的】本研究では、精神障害領域における青年期発達障害の実態、発達障害に関わる OTR の現状、介入における課題等を予備調査によって把握し、必要な支援について明らかにすることを目的とした。本研究の結果を踏まえ、今後、青年期発達障害の特性を踏まえた作業療法評価・プログラムの開発等、現状に基づいた具体的な支援方法について検討する方針である。

【方法】静岡・愛知県内にあり、OTR が在籍している精神障害領域の病院・施設にアンケート（無記名）を郵送にて配布し、回答を得た。なお、情報の偏りを避けるため、回答者は各病院・施設 1 名とした。また、聖隷クリストファー大学倫理委員会の承認を得てから実施した（承認番号 21040)。

【結果】静岡・愛知県内の病院・施設 87 ヶ所に送付し、41 施設より回答を得た（回収率 47.1%)。回答施設の内訳は、病院・診療所 35 ヶ所、福祉施設 4 ヶ所、訪問 1 ヶ所、NPO 法人 1 ヶ所であった。回答者の経験年数は平均 14.2 年であった。OTR が介入、支援に取り組んで「得られた成果がある」と回答した施設は 75.6%であり、就労等のステップアップに結びついたことや本人と周囲との関係性の改善、トラブルの減少等が結果として見られたと述べていた。一方で変化の程度が測りにくく、また汎化が進みにくいことから「成果を得られていないと感じる」と回答した施設もあった。現在、支援において感じている課題については 90.2%が「ある」と回答し、具体的には「対象者への直接的な対応（73%)」が最も多く、次いで「目標設定・プログラム設定(56.8%)」「病院・施設としての課題(56.8%)」が多かった。課題に対して現在取り組んでいることとしては「発達障害に関する文献検索（45.9%)」が最も多く、次いで「カンファレンス・事例検討（35.1%)」が多かった。また、「特に何もしていない（18.9%)」という回答もあった。今後、精神障害領域において発達障害に関することで必要だと感じていることについて、「発達障害に関する知識習得（61%)」が最も多く、次いで「対象者への対応方法（53.7%)」「目標設定・介入プログラム（51.2%)」という結果であった。

【考察】先行研究で指摘されているような支援体制の整備や支援者側の教育・研鑽の機会がないことを危惧している OTR が多いことが分かった。今後も発達障害に携わる OTR は増えていくと思われるが、それらの課題を解決し、対象者に合わせた質の高い支援をどの病院・施設でも提供できるような研修会の機会、マニュアルの開発等が必要であると考える。